

鹿児島県立埋蔵文化財センター

Kagoshima Prefectural Archaeological Center

まいぶん



埋文だより

第97号

令和8年9月30日発行

下城跡

しも じょう あと

地形を改変したダイナミックな縄張と構造



天正20（1592）年に豊臣秀吉の朝鮮出兵（文禄の役）の際を突いて反乱を起こした武将、「梅北国兼」をご存知でしょうか。島津氏の家臣でありながら、「梅北一揆」を主導した、南九州の戦国史において極めて重要な人物です。

始良市北山の標高約270mの尾根上に位置する下城跡は、この梅北国兼の居城であったとされてきた遺跡です。県単道路整備事業に伴い、当センターが令和6年度に発掘調査を実施しました。今年3月に刊行された報告書をもとに、山城の構造とその歴史的価値を解説します。

目次

- ・ 報告書新刊…………… 1～3
（下城跡・野首遺跡・南水ヶ迫B遺跡）
- ・ 発掘速報…………… 4～7
（発掘調査予定・石荒A遺跡・焼山遺跡）
- ・ パネル展～南の縄文文化魅力発信事業～… 8

報告書！ 速報

昨年度報告書が刊行されている、県立埋蔵文化財センターと（公財）埋蔵文化財調査センターの整理報告の成果の一部を紹介します。

県立埋蔵文化財センター（公財）埋蔵文化財調査センター

領主の動向と地域史を紐解く、梅北国兼ゆかりの城館

一下城跡（始良市北山）一



「城」といえば近世の天守閣や石垣を連想しがちですが、中世末期の在地の城館は、自然地形を巧みに改変した「土の城」です。表紙のダイナミックな空撮写真で見られるように、下城跡は標高約 275m のシラス台地を利用し、主要な 5 つの「曲輪」を南北に一直列に配置した「連郭式」と呼ばれる構造の山城です。

16 世紀中頃の始良は、島津氏と蒲生氏・祁答院氏らが激しい合戦を繰り広げた地域でした。その後、弘治 3（1557）年から天正 8（1580）年にかけて、豊臣秀吉に反旗を翻したことで有名な島津氏家臣・梅北国兼が地頭としてこの地を治めており、この時期に下城跡も大規模に整備されたと考えられます。今回の発掘調査は、まさにその激動の時代の防衛システムや当時の人々の暮らしが分かるものとなりました。

発掘で判明した「薬研堀」と、武士たちの登城ルート

表紙でオレンジ色に示された「空堀」の数々は、調査によってその実態が明らかになりました。主郭（曲輪 1・2）を取り囲む「空堀 2」や、曲輪 3 北側の「空堀 4」の堆積土を除去したところ、堀底の断面が V 字形に鋭く落ち込む「薬研堀」であることが確認されたのです。堀底は一人しか移動できないほど狭く、敵の侵入を完全に阻む構造でした。

さらに、本丸の虎口跡とみられる場所からは 2 つの柱穴が並んで検出され、当時は「冠木門」のような門が構えられていたと推測されます。周辺からは柵の跡とみられる柱穴列も見つかっており、戦国時代の武士たちがこの厳重な防衛線をくぐって登城していた情景が浮かび上がります。



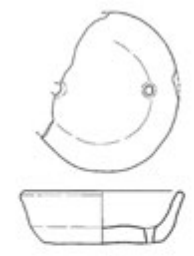
薬研堀（断面）

遺物が語る武士の暮らしと生活

最も広い「曲輪 5」からは、中国産の青磁や白磁、青花、藍釉陶器が出土し、遺構密度は高く、遺物も比較的豊富でした。また、城内からは日常生活や生産活動を示す遺物も見つかりました。近くの川原で採れる石英（瑪瑙・玉髓系）を利用した「火打石」や、当時の娯楽を物語る緑色岩・石英製の「碁石」、さらに曲輪 5 からは、銅や鉛が検出された金属加工用の「取鍋」が出土し、城内で武器や道具の修理・製造が行われていた可能性があります。



取鍋



土師器皿

さらに、珍しい「穿孔（穴）のある土師器皿」が 2 点出土しており、中世後期の葬送儀礼や祭祀に関わる遺物として注目されます。

縄文時代の調理場跡と漁労への工夫

一野首遺跡（志布志市志布志町帖）一



野首遺跡は、旧石器から近世・近代までの複合遺跡です。

縄文時代早期（約 9,000～6,000 年前）には、計 86 基もの集石（調理場跡）が密集して検出されました。定住を示す住居跡がないことから、当時の人々が豊かな自然の恵みを求めて繰り返し利用した巨大なキャンプ地であったと考えられます。

古墳時代（4 世紀半ば）に入ると、1 軒の竪穴建物跡とともに、先端に「カエシ」のついた希少な「釣り針」が出土しました。県内でも数少ない出土品のひとつです。

また、出土石器の構成からは、石錘の出土数の多さが目立ちます。キャンプ地的環境や古墳時代の釣り針が出土していることから、これらの石錘は漁労利用の可能性が高いと考えられます。「釣り漁」や「流し刺網」、「固定刺網」として、近くを流れる前川の水流や魚種に合わせて高度な漁法を使い分けていたことが推察されます。

長期間留まる場所ではないものの、周辺から人や物の流れが連綿とあった遺跡といえます。



長きにわたり使われ続けた道

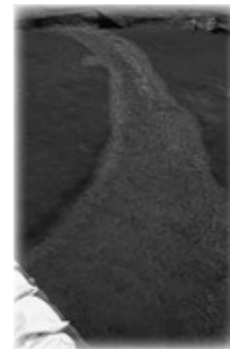
一南水ヶ迫 B 遺跡（志布志市志布志町帖）一



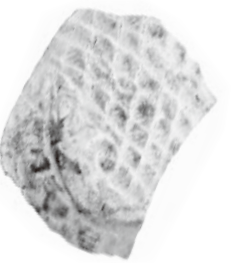
南水ヶ迫 B 遺跡は、旧石器時代から近世にいたる遺構が確認されていますが、今回の報告書では、特に縄文時代中期以降の遺構・遺物について成果をまとめています。

本遺跡の最大の特徴は、中世から近世の溝状遺構が 19 条、帯状硬化面が 14 条見つかったことです。溝状遺構の機能としては道跡や区画溝の可能性が、帯状硬化面は道跡の可能性が想定されます。さらに、これらの時期や新旧関係は、検出面、埋土状況、遺構内遺物、埋土の切り合い関係などから、4 つの時期（中世以前、中世、近世以降、近代）と判明しました。

また、出土した陶磁器類の特徴から中世後半期（15～16 世紀中頃まで）と近世後期（18 世紀以降）に特に人々の往来が盛んであったことがわかりました。中世の陶磁器は、中国南部産の壺や鉢、良品であったことが考えられる青磁の水注の把手部分など多様な遺物が見られたことから、その当時は貿易陶磁器を得る手段をもつ人の存在があった可能性があります。さらに、鹿児島県内に出土例の少ない「華南三彩の鳥形水注」や「翡翠釉の小皿」などの特殊な遺物が出土していることも中世の遺物の特徴です。

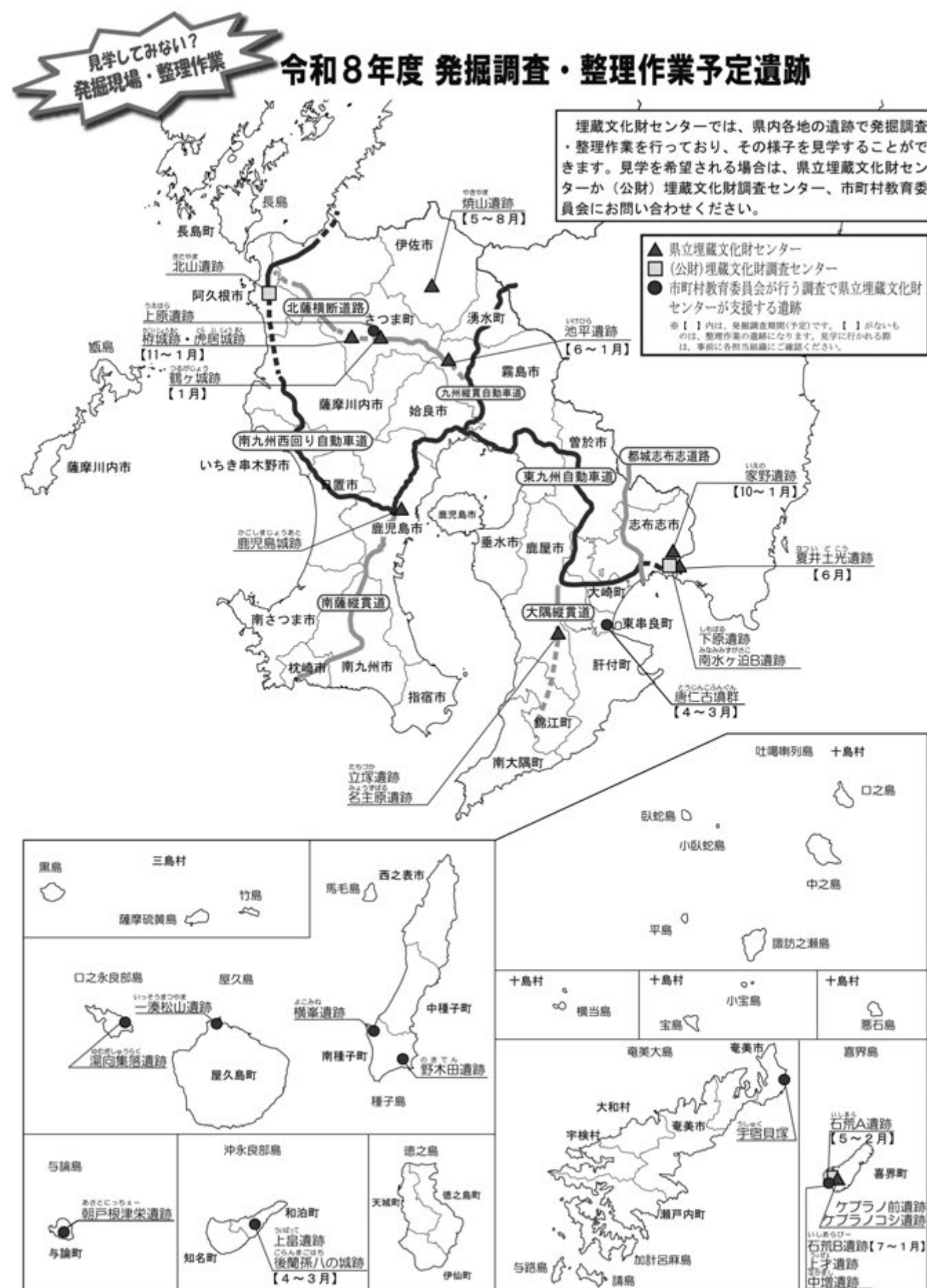


道跡



華南三彩の小片

中世から近世にいたる長い期間にわたり、道が維持され、使われ続けていた様相を現代に伝える貴重な遺跡です。



喜界島の暮らしと交流



(公財)埋蔵文化財調査センター
— 石荒A遺跡 (大島郡喜界町中里) —

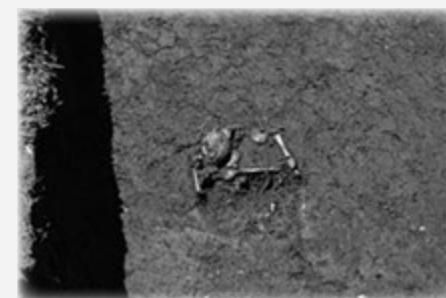
石荒A遺跡は、大島郡喜界町中里に所在し、喜界第2地下ダム建設に伴って令和8年5月末から発掘調査を行っています。本遺跡では、縄文時代や鎌倉時代から室町時代頃と思われる遺構や遺物が発見されています。

縄文時代では、縄文土器片の他に、島内では手に入らない石を利用した打製石斧や磨製石斧、黒曜石やチャートの剥片などが出土しています。

鎌倉時代から室町時代頃の遺構として、土坑墓が6基、掘立柱建物跡6棟、竪穴建物跡1軒、貝殻や動物の骨が出土した溝状遺構やピットなどの遺構が検出され、遺物は中国から輸入された陶磁器（青磁・白磁）、徳之島で作られたカムィヤキ、長崎で作られた滑石製石鍋の破片などが出土しています。

土坑墓からは、新生児や 40 歳代の男性の人骨などが発見されています。喜界島の土壌が琉球石灰岩や隆起サンゴ石灰岩で形成され、骨が溶けにくい土壌であることから現在まで残っていたと考えられます。新生児の骨は、体を丸めたような状態で検出され、小さな穴に納められていたと思われます。本遺跡の約 3 km 南にある川寺遺跡でも同じような状況で見つかっています。40 歳代の男性の骨は隅丸方形すみまるほうけいのプランの土坑から検出されましたが、他の土坑墓とは違い、土に貝殻やサンゴが混ざった状態で埋められていました。

縄文時代や中世の頃から、島に住んでいた人々が他の地域との交流を盛んに行い、生活を営んでいたことが窺えます。現在も調査を進めており、これからどのようなものが発見されるか楽しみです。



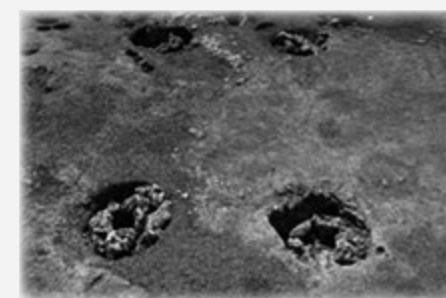
土坑墓 1



土坑墓 2 (40 代男性)



土坑墓 3 (新生児)



掘立柱建物跡



豎穴建物跡



溝狀遺構（遺物出土狀況）



開かれた黄泉への扉



県立埋蔵文化財センター
—焼山遺跡（伊佐市大口下殿）—

焼山遺跡は伊佐市大口下殿（旧大口南中学校地）に所在し、5～8月まで発掘調査を行いました。焼山遺跡は、昭和 21（1946）年～昭和 23（1948）年にかけて、伊佐市（旧大口市）で医師であり考古学者としても活躍していた寺師見國氏らによって4基の板石積石棺墓が調査されました。さらに、昭和 37（1962）年に7基が調査され、全てにおいて鉄製の鍬や剣が出土した遺跡として知られています。また、その後の周辺踏査の結果でも多数の墓が確認され、そのうち1基は大口高校敷地内に移設されています。

板石積石棺墓とは、古墳時代の南九州特有の墓で、熊本県南部～鹿児島県北西部～宮崎県に集中して分布しています。鹿児島県では、特に川内川流域に分布しています。伊佐市域では、焼山遺跡のほかに大住古墳群や平田遺跡などで確認されています。

構造は、土を盛り上げた前方後円墳などの古墳とは異なり、地面に墓穴を掘って、側面に石（側石）を立てて円形や方形の石棺を作り、その上部に板状の石を持ち送り式（少しずつずらして重ねる方法）でドーム状に積み上げて天井をつくり、蓋をするものです。



大口高校に移設された板石積石棺墓



検出状況



板石の積み上げ状況



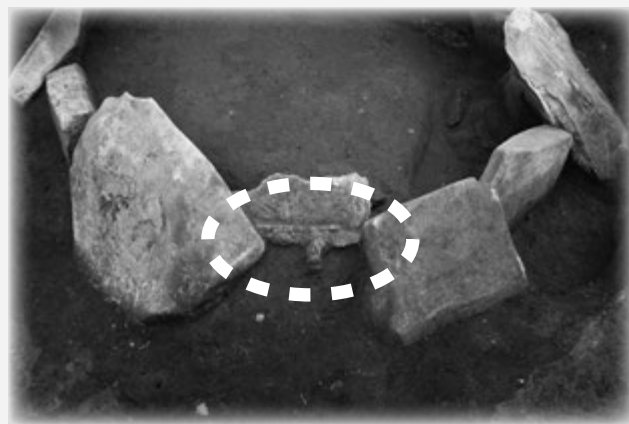
床面周囲の石の状況

今回の発掘調査では、9基の板石積石棺墓が確認されました。多くの板石積石棺墓は、上部が後世の削平でなくなっていました、ドーム状の天井付近まで残っているものが1基ありました。この残りのよかったものでは、次のように作っていたことが分かりました。

- ① 墓穴を掘った後に、底に鉄の鍬や剣を置く。
- ② その上に死者を埋葬するため床面を作る。
- ③ 床面の周囲に円形に大型の石を立てて埋めて石棺を作る。
- ④ 立てた石の間から時計回りに石を持ち送りでドーム状に板状の石を積み上げて天井を作る。

また、死者を埋葬した床面周辺だけではなく、鉄製の鍬や剣が積み上げた板状の石と石の間からも出土しており、墓を作りながらそれらを埋めていったことも分かりました。

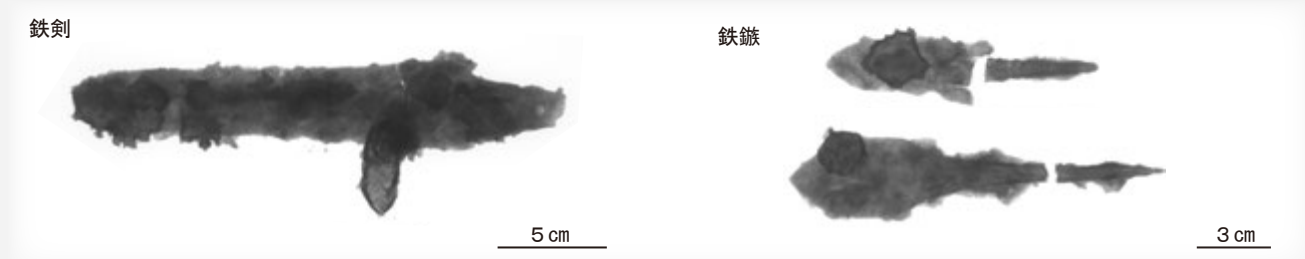
鉄製品は全部で 20 点以上出土していることから、古墳時代におけるこの地域の有力者の墓であった可能性があります。このように、今回の調査では、墓の作り方やその方法、副葬品の配置方法といった様々なことが分かりました。



鉄剣の出土状況



床面の鉄製品の出土状況



出土品のレントゲン画像

今回の調査区で確認された板石積石棺墓は、まとまって作られています、前の墓を壊して同じ場所に墓を作るといったことがありませんでした。墓の場所を示す墓標のようなものがあったかもしれません。

今回の調査では、この板石積石棺墓の他にも、古墳時代の土坑や中世の炉跡、竪穴建物跡が確認され、旧石器時代～江戸時代までの遺物が出土しました。

パネル展開催！～南の縄文文化魅力発信事業～

南の縄文文化魅力発信事業でパネル展を実施しました。5月にかごしま山形屋で『遺跡から出土した「推し」の逸品』と題して、職員一推しの遺物を写真と説明でご紹介しました。また、6月からは鹿児島空港3階において『空から見た鹿児島の遺跡～暮らしの跡を見てみよう！』を開催しました。上空から見た遺跡を中心に、普段とは少し違う視点から県内の遺跡を紹介しました。担当者イチオシの遺物と遺跡を紹介します！

「推し」の逸品@山形屋



ないこうかもんきょう

内行花文鏡

ひがしめん
(東免遺跡：霧島市隼人町)【弥生時代】

弥生時代の小形内行花文鏡(紀元100年頃)で、福岡県春日市の須玖遺跡群で铸造された可能性があります。青銅鏡の中央には穿孔があり、撚られた紐を通した状態で出土しています。古代の土坑で弥生時代の青銅鏡が出土していることから、数百年に渡り伝世された鏡と考えられます。

空から見た遺跡【立小野堀遺跡】



空撮(遺跡より高隈山を望む)

古墳時代の地下式横穴墓が195基検出されました。これだけの規模の地下式横穴墓の調査は県内初になります。副葬品として、鉄鏃・鉄剣を中心とした約400点以上の鉄器や、朝鮮半島などから持ち込まれたと考えられる青銅で作られた鈴も10点出土しました。



地下式横穴墓内の様子

おしらせ

東京展示

【日時】10月24日(土)～25日(日) 10～18時

【場所】かごしま遊楽館 東京都千代田区有楽町1-6-4
千代田ビル3階 鹿児島ブランドショップ東京店内

【内容】鹿児島県出土の縄文土器や石器を持っていき、南九州で栄えた縄文文化の魅力をわかりやすく、解説します。東京で見る機会は少ないため、ぜひ、お越しください。



昨年度の様子

当センターの見学は、土曜・日曜・祝日・年末年始を除き、毎日午前9時～午後5時まで、入館料は無料です。

当センターのホームページ及びフェイスブックは右側のQRからお入りください。

Instagramは、(https://www.instagram.com/kago-shima_maibun)からお入りください。

検索キーワード

上野原縄文の森

検索

クリック



ホームページ



フェイスブック

埋文だより 第97号

発行日 令和8年9月30日
編集・発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4318 鹿児島県霧島市
国分上野原縄文の森2番1号
TEL 0995-48-5811・FAX 0995-48-5820
URL:<https://www.jomon-no-mori.jp>
E-mail: maibun@jomon-no-mori.jp